武蔵野日曜集会

旧き我新しき我

――ロマ書第６章１～23節――

１９９６年５月19日（武蔵野）
小池辰雄

キリストの中に入っている　罪びとでありかつまた義人　ゼロ＝無限大　新しき我　エン・クリスト　永遠の現在　力強い愛　栄光の体

【ロマ６・１～23】

1 されば何をか言わん、恩恵の増さんがために罪のうちに止まるべきか、
2 決して然らず、罪に就きて死にたる我らは争で尚その中に生きんや。3 なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、その死に合うバプテスマを受けしを。4 我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦らせられ給いしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。5 我らキリストに接がれて、その死の状にひとしくば、その復活にも等しかるべし。
6 我らは知る、われらの旧き人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪の体ほろびて、此ののち罪に事えざらん為なるを。7 そは死にし者は罪より脱るるなり。8 我等もしキリストと共に死にしならば、また彼とともに活きんことを信ず。9 キリスト死人の中より甦えりて復死に給わず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。10 その死に給えるは罪につきて一たび死に給えるにて、その活き給えるは神につきて活き給えるなり。11 斯くのごとく汝らも己を罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思うべし。
12 然れば罪を汝らの死ぬべき体に王たらしめて其の慾に従うことなく、13 汝らの肢体を罪に献げて不義の器となさず、反って死人の中より活き返りたる者のごとく己を神にささげ、その肢体を義の器として神に献げよ。14 汝らは律法の下にあらずして恩恵の下にあれば、罪は汝らに主となる事なきなり。
15 然らば如何に、我らは律法の下にあらず、恩恵の下にあるが故に罪を犯すべきか、決して然らず。16 なんじら知らぬか、己を献げて僕となりて、誰に従うとも其の僕たることを。或は罪の僕となりて死に至り、或は従順の僕となりて義にいたる。

17然れど神に感謝す、汝等はもと罪の僕なりしが、伝えられし教の範に心
より従い、18罪より解放されて義の僕となりたり。19斯く人の事をかりて言う
は、汝らの肉よわき故なり。なんじら旧その肢体をささげ、穢と不法との僕
となりて不法に到りしごとく、今その肢体をささげ、義の僕となりて潔に到れ。
20なんじら罪の僕たりしときは義に対して自由なりき。21その時に今は恥とす
る所の事によりて何の実を得しか、これらの事の極は死なり。22然れど今は
罪より解放されて神の僕となりたれば、潔にいたる実を得たり、その極は
永遠の生命なり。23それ罪の払う価は死なり、然れど神の賜物は我らの主キ
リスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。

●キリストの中に入っている

日曜日は「安息日」というんですが、我々にとっては安息日ではない。キリストの力を、光を、愛を、生命を新しくまたいただく。そういう日です。私は日曜が一番楽しい。皆さんと聖書の世界の中に一緒に入ることが何より楽しい。安息ではなく、力をいただく日なんです。

一人びとりにはみないろいろなドラマがあると思いますが、どうぞ、ドラマを大いに信仰の世界で活かしてください。我々の体験というものは、過去のいろいろなでき事を逆に活かして進んでいくことができる。これが我々の信仰のありがたさです。どんな経験にあっても、必ずそれを何らかの意味で土台として進んでいく。マイナスも本当の意味でプラスにしてしまう。そういうのが我々の「神交」の世界です。

神交わりの世界です。キリストの中に入っているから、信じ仰ぐなんていう「信仰」は要らない。神・キリストの中に自分を投げ入れている。そして、神・キリストと一つにされる。これが救なんです。そのうちに一つになるのではない。現に一つにされている。絶対恩寵の世界です。親鸞は

「弥陀の本願は私一人のためにあった」

と言った。弥陀の本願は自分一人のためだという、親鸞のあの自覚は素晴らしい。親鸞の信仰は我々に素晴らしい暗示を与えてくれる。

我々はいろいろな体験を、キリストへの体験として活かしていく。キリストの中へ入れられてしまったら、もう問題ない。既に救われている。「救われんがために」なんて、パウロは書いているが、「救われんがために」ではない、もう救われているんです。

●罪びとでありかつまた義人

5我らキリストに接がれて、その死の状にひとしくば、その復活にも等しか
るべし。

これは素晴らしいね。

6 **我らは知る、われらの旧き人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪の体ほろびて、此ののち罪に事えざらん為なるを。**

我々の生まれつきの人間を「旧き人」という。「罪びと」というのは、普通の人には分からない言葉です。

「何も悪いことをしないのに、なぜ、クリスチャンは罪びとなんて言うか」

と。「生まれつきの自分」というのは罪びとなんです。信仰に入ったから罪びとでないかというと、そうはいかん。生まれつきの自分というのはやはりある。二重構造になっている。生まれつきの我々は「罪びと」で、これがキリストの義をいただく。そうすると、これは「義人」です。我々クリスチャンは罪びとであり、かつまた、義人であるわけです。義人というのは、偉くなって義人になったのではない。キリストの義をいただいたからです。旧約から新約にいたるまで、この「義」という言葉は非常に大事な言葉です。この「義」というのは、ただ正しいという意味ではない。キリストの義というのは霊的な内容なんです。義という言葉は躓きになるけれども。

キリストというのは無我、無私のひとなんです。自分は無我、無私で、私が無い。

「われ何ごとをも為しあたわず」

「何も教えることもできない」

とキリストは言っている。自分はゼロだと。ヨハネ伝に書いてある。

「我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審きは正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。」（ヨハネ5・30）

とある。

●ゼロ＝無限大

生まれつきの我々を「罪びと」という。そして、キリストの義を頂いている。「義」というのは、神の御意を行うことを「義」という。聖意体現です。神の御意を、聖意を体現した、そういう無私無我のひと、これがキリストなんです。キリストは聖意体現者です。神の御意を全的にして、自分の意ではない。

「わが意にあらず、汝の御意を成させたまえ」

と言われた。だから、本当の無者は聖意体現者です。ゼロ＝無限大になる。我々は二重構造だけれども、本質的には信仰の現実では、我々はゼロなんだ。ゼロを賜っている。自分でゼロになったのではない。悟ってゼロになったのではない。キリストから完全に、過去・現在・未来の我というものは贖われてしまっている、贖いとられている無我無私の世界です。そうすると、それは無限大になる。私たちは躓いたり転んだりしている。けれども、本質はゼロなんだ。

「自分の信仰がどうだこうだ」
なんて、そんなことを考えているうちは、いつまでたっても始まらない。
「私は信仰なんかありません。ただ、キリストに圧倒されて平伏しているだけです。躓いたり転んだりして、相対的人間小池はしょうがない野郎です。けれども、その根底には――私はゼロなんです、自分はありません――キリストの力がきてますから」
と、それをはっきり言える。これは誰もこれを崩すわけにいかない。あなた方一人びとりはそういうわけです。自分の信仰なんて考えていると、それは相対的な世界だから、「信仰がどうだこうだ」なんていうことになる。そんなものはいつまでたっても始まらない。
「何もありません。キリストからゼロをいただきました。無私無我をいただきました。そうしたら、無限無量のキリストの力がやってきます」
と。これが本当の現実なんだ。だから、ありがたくてしょうがない。楽でしょうがない、力が来てしょうがない。しょうがない世界なんだ。あなた方、そうでしょ。だから、楽しくてしょうがない。
日曜は、あなた方と一緒にこの福音の世界にこうやって入れられることが、楽しくてしょうがない。だから、私は日曜が一番好きだ。安息日ではない。力をいただく日なんだ。

●新しき我

そういうキリストの力ある愛、これは一切に勝ちます。勝つというのは、相手を倒すことではない。相手を救ってしまうことです。本当の勝利というものは、相手を救う、そういう勝利です。
キリストの義は同時に愛である。キリストの義をたまわる。神さまの御意を現ずることが義ですから。それは力がくる。それを頂くことが即ち愛なんです。神さまの御意を行うその力をキリストが下さる。それは愛なんだ。義と愛とは同じことなんです。
「罪びとでありかつまた義人である」
とはそういうことです。
「旧き我」とは生まれつきの我々のこと。「新しき我」とは、キリストがくださった我です。そういう二重構造になっている。二重構造だけれども、新しき我がいつも首位をしめている。旧き我は問題にならない。この新しさは――普通のものは新しくてもまた古くなるけれども――これは古くならない新しさです。不滅の新しさです。いよいよ新たなりというわけです。

7そは死にし者は罪より脱(のが)るるなり。8我等もしキリストと共に死にしならば、また彼とともに活きんことを信ず。

パウロは「もしキリストと共に死にしならば」と書いているが、私は

「我らはまことにキリストと共に死んだから」

と読みたい。私たちは本当にキリストと共に死んだ。ということは、キリストは死ぬ必要はないんだけれども、我々の救のために贖いの死をとげられた。それをパウロはこういう言い方をしている。だから、贖ったキリストは今度は復活のキリストとして永遠の生命を我々に下さる。「彼とともに活きんことを信ず」ではない。本当は、

「彼とともに活きたり」

です。パウロの言い方は少しまだるっこい。キリストの生命をいただいて、復活の生命をいただいて、彼とともに活きたということです。

「キリストを信ずる」ではない。全存在で受けとる、体受することです。キリストを体受する。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

とパウロが言ったあの世界です。

「我らに賜いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に注げばなり。」(ロマ５・５)

とある。その具体的なものは聖霊だ。「神・キリスト・聖霊」は三位一体で離すことができない。キリストは、

「十字架で贖いをやったら、それから後でお前たちにやるものがある。思い迫ることといかばかりぞや」

と仰った。それは聖霊のことです。「霊なる我が私の中に入る」ということは聖霊のことです。「神・キリスト・聖霊」は離すことができない。

十字架の贖罪をされて、我々は、旧き我は葬られてしまった。今度は、復活のキリストが永遠の生命を私たちにくださる。それが「新しき我」です。この新しき我は古びない我、古びない新しさです。ギリシヤ語で「カイノス」というのは古びない新しさです。「ネオス」は古びる新しさです。「新約」とは「カイネー・ディアテイケー」という。

●エン・クリスト

5 我らキリストに接がれて、その死の状にひとしくば、

キリストが贖罪の死を遂げて我々も旧き我に死んだ。

その復活にも等しかるべし。

今度は新しき我にされた。この新しき我はいよいよ新しくなる。

6 我らは知る、われらの旧き人、キリストと共に十字架につけられたるは、
罪の体ほろびて、此ののち罪に事えざらん為なるを。7 そは死にし者は罪より脱るるなり。8 我等もしキリストと共に死にしならば、また彼とともに活きんことを信ず。

ややこしい言い方をしているね。

「我々はキリストと共に死んだから、彼と共に活きている」

ということです。パウロは「もし……死にしならば、また彼とともに活きんことを信ず」なんて、可能的な言い方をしているけれども。我々キリスト者は、この「カイネー」の意味の新人なんです。

9キリスト死人の中より甦えりて復死に給わず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。10その死に給えるは罪につきて一たび死に給えるにて、その活き給えるは神につきて活き給えるなり。

「罪につきて」とは「罪に対して」ということ。ここはただ「対して」といっているけれども、「対して」という前に、神の中に入っているから、ただ「対して」ばかりではない。「己を罪につきては死にたるもの」とは

「旧き我について死んだものである」

ということです。「活きたる者と思ふべし」ではない。

「キリスト・イエスに在りて活きたる者である」

ということ。パウロは婉曲な言い方をしている。

あなた方は、聖書でも、ただ言葉にこだわってはだめですよ。こんな言い方をしているけれども本当はこういうわけなんだということを、言葉の奥の世界をちゃんと読んでいかないとね。

この新人は、キリストにあって活きている新人なんだ。

「エン・クリスト」

です。「キリストにあって」「キリストの中で」ということです。キリストの中に入っていなければだめなんだからね。これは対象的ではないんだ。だから、永遠の生命の中に入ってしまったから、我々には相対的な死はあっても、本質的な死はもうないんです。肉体の死はあったって、霊的には死なない。もう死なんか既に突破してしまっている。だから、死という言葉は我々には意味をなさない。

そういった烈々たる現実です。雲がかかっても、雨がふっても、太陽はちゃんと照っている。そういう世界です。運命環境に支配されない。

●永遠の現在

12然れば罪を汝らの死ぬべき体に王たらしめて其の慾に従うことなく、13汝らの肢体を罪に献げて不義の器となさず、反って死人の中より活き返りたる者のごとく己を神にささげ、その肢体を義の器として神に献げよ。14汝らは律法の下にあらずして恩恵の下にあれば、罪は汝らに主となる事なきなり。15然らば如何に、我らは律法の下にあらず、恩恵の下にあるが故に罪を犯すべきか、決して然らず。

モーセの律法、いわゆる道徳の下ではない。道徳といえば、藤井先生が一生懸命で「道徳、

道徳」と言っていたが、あるときになって、

「自分は大きな間違いをしていた。もう道徳なんかやめだ」

と言った。藤井先生は非常に義の強い人だったから、道徳を非常に問題にしたけれども。

「道徳なんていう言葉が自分はもう言えなくなった。本当の福音の世界はそんなことではなかった」

と。

16なんじら知らぬか、己を献げて僕となりて、誰に従うとも其の僕たることを。
或は罪の僕となりて死に至り、或は従順の僕となりて義にいたる。
17然れど神に感謝す、汝等はもと罪の僕なりしが、伝えられし教の範に心
より従い、18罪より解放されて義の僕となりたり。19斯く人の事をかりて言う
は、汝らの肉よわき故なり。なんじら旧その肢体をささげ、穢と不法との僕
となりて不法に到りしごとく、今その肢体をささげ、義の僕となりて潔に到れ。
20なんじら罪の僕たりしときは義に対して自由なりき。

そんな自由は本当の自由ではない。

21その時に今は恥とする所の事によりて何の実を得しか、これらの事の極は
死なり。22然れど今は罪より解放されて神の僕となりたれば、潔にいたる実
を得たり、その極は永遠の生命なり。

「その極は」ではない。それは永遠の生命が既に来ているから。

23それ罪の払う価は死なり、然れど神の賜物は我らの主キリスト・イエスに
ありて受くる永遠の生命なり。

永遠の生命は既に来ているんだ。パウロは未来的な言い方をしているけれども。本当の神交の世界は現実なんですよ。過去でもなければ未来でもない。永遠の今、永遠の現在なんだ。永遠を背後としたところの永遠的な現在なんです。これが本当の神交の世界です。信じ仰ぐ信仰ではなく、神交わりの神交の世界です。神・キリストとの交わりの世界、キリストに在るところの世界です。「エン・クリスト」「イン・クライスト」です。

パウロというのはややっこしい言い方をする。その点は、ヨハネの方がスーッスーッと簡単なんです。

●力強い愛

ローマ書8章に、

「35我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、
飢か、裸か、危険か、剣か。36録して『汝のために我らは、終日、殺されて
屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。37然れど凡てこれら
の事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。

これはいい。「我らを愛したもう者」とはキリストです。キリストにあって勝ち得て余りあり。

38われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、39高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。（ロマ８・35～39）

これは素晴らしい言葉だね。

キリストにあるところの神の愛、あるいは、キリストの愛と言ってもいいけれども、この愛から何者も離すことができない。キリストの愛というのは、私たちを救ってやまない、展開させてやまないところの愛です。力ある愛です。そして、それは私たちを通してまた人を生かす、人を助ける、人を救う。そういう愛です。だから、「愛は一切に勝つ」という。我々がいただいている愛は、そういう力強い愛ですよ。ただ、いわゆる「愛する」ではないんです。

●栄光の体

ピリピ書に素晴らしい言葉がある。ピリピ書3章20節から、

「20されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。

キリストが再臨される。

21彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の体を化えて己が栄光の体に象らせ給わん。」（ピリピ３・20～21）

既にかたどってくださっているからいよいよそうするという。ピリピ書3章8節から、

「8然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なりと思い、彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥のごとく思う。

もう何も要らんと。

9これキリストを獲、かつ律法による己が義ならで、唯キリストを信ずる（受けとるところの）信仰による義、すなわち信仰に基づきて神より賜る義を保ち、キリストに在るを認められ、10キリストとその復活の力とを知り、又その死に効いて彼の苦難にあずかり、11如何にもして死人の中より甦えることを得んが為なり。」（ピリピ３・８～11）

畳みかけて言っている。まぁ、その時の人たちに語っているんだから、少し婉曲ないろいろな言い方をしているわけですけれども。我々はもっと簡単に受けとっていいわけです。

読売新聞（１９６６年７月24日）の日曜版宗教蘭に私は「霊的な一大突破」（小池辰雄著作集第六巻『随想集』451頁掲載）というのを書いている。読んでみてください。（省略）